

XBRL は情報利用者の有効な分析ツールとなりえるか？

松山 将之

XBRL (eXtensible Business Reporting Language の略称)^{*} は、財務報告用のコンピューター言語の一種である。そのままでは使えないが、最近では XBRL そのものを理解できなくても使いこなすことができる様々なアプリケーションが、安価若しくは無料で提供されている。この言語を用いて、各国の会計基準に対応した電子的な財務諸表の雛形(タクソノミ)が作成され、我が国でも、2008 年度の財務報告から導入されている。例えば、金融商品取引法に基づく開示書類の電子開示システムである EDINET では、有価証券報告書の全てがこの XBRL によって記述され、誰でも XBRL 化された財務情報を入手することができる時代となった。

* 本コラムで述べる XBRL には、その周辺技術である InlineXBRL やディメンションも包括されている。

そもそも財務情報の XBRL 化が進められた背景には、情報の作成者と利用者の双方にメリットがあるからである。企業などの情報作成者にとってのメリットは、データの一貫性を維持できる点にある。XBRL 化された財務情報は、入力時点から利用時点までの一貫したデータとして、決算短信、有価証券報告書、税務申告等の様々な開示書類の作成に活用できる。一方、投資家などの情報利用者にとってのメリットは、低コストかつ効率的に情報収集ができる点にある。XBRL 化された財務情報の勘定科目をキーとして集計すれば、時系列データや企業間比較データとして、新たにデータベースを構築することなく、そのまま入手して分析に活用することが可能となる。

しかし、XBRL についての認知度は、特に情報利用者サイドで低いと言われている。投資家の利用する財務情報は、情報ベンダーなどの情報加工業者の提供するデータベースを利用することが主流であり、学識者等で利用されることは少なく、学術論文や雑誌記事において、XBRL を用いた分析例はほとんど見られない。すなわち、我が国における XBRL 化された財務情報の位置付けは、情報加工業者のための作業用データにとどまり、本来の情報利用者のための有効なツールとはなっていないのだ。この背景には、XBRL が商業用データベース構築のための不可欠な技術ではあるが、利用普及に向けての啓蒙が足りないことが関係していると思われる。

かかる状況下で、開示情報の XBRL 化の適用の範囲は、今や財務情報だけではなく、非財務情報にも拡大しつつある。コーポレートガバナンスコードも既に XBRL 化されており、関係者の間では、その活用に関心と期待が高まっている。但し、ここでも現在の議論の中心は、XBRL の技術面についてであり、その利用方法には議論されておらず、“もったいない”状況になっている。XBRL が今後、有効に活用されるようになるためには、情報利用者向けの研修会やセミナーの開催等を通じて、直接、XBRL の技術を活用・分析し、積極的に発信できる環境を整備していくことが重要であろう。このような活動を継続的に行うことによって、利用者の裾野を広げ、XBRL が真に有効なツールとして認識され、情報利用の高度化にもつながっていくことを期待したい。

2016 年 1 月 25 日